

友 諒 会 誌

2003年1月発行

<http://mipultra.yz.yamagata-u.ac.jp/yuryo/>

目 次

1. [友諒会長挨拶](#)
2. [退官教・職員挨拶](#)
 - ・ 高橋寛教授
 - ・ 八木田幹教授
 - ・ 鈴木和雄技官
 - ・ 木村芳治技官
 - ・ 小山田扶二子事務官
 - ・ 山口たい子技官
3. [学科送別会のお知らせ](#)
4. [編集後記](#)

[過去の会報](#)

[友諒会トップページ](#)

1. 友諒会長挨拶

学科長 横山孝男

学び舎を胸に

真理の探求に正面から自らの一生を捧げた人は数多い。誰でも自らの人生を探求しているのだと言うべきである。名も残さず海の藻屑と消え異邦の地で土となった人もそうであろう。

工学とは技術の学問である。術とは本来「先人の行いをまねる」という意味である。技術ほど、先達の成果を引き継ぎ他の有用なものを取り入れ合目的に垣根を越えて発展して来たものはない。

大学とは長い文化の重みを系統立てて僅か4年で修得させようと言う、極めて虫の良い文化伝承機関と言える。道とは耐えることでもある。耐えて自分の力をつけて始めて道は開かれる。努力しなければ道は見つからない。そして歩き切れるものではない。

雷穿石(りゅう石をうがつ)。雷は雨だれ。心に抱いたものは雨だれのように石さえも通す。心にあることは実現する。

円仁は遣唐使使節団の一員として838年に博多を出る。3度目の正直である。4艘の内、無事辿り着くのは一艘だけであった。団員は所定の期間で本邦へと戻るが、円仁とその意を同する僅かの僧は、847年まで中国の地に滞る。総て彼の真理を求める道であった。今のように交通手段を持たない時代に、円仁の足と熱意に答える人々の善意の為せる旅であった。

我々の前には先人がいる。我々はそこから学び、それに続く。大天才と言われるレオナルド・ダ・ピンチにさえ少なくとも3人の大先達がいた。Filippo Brunelleschi (1377-1446)等である。ダ・ピンチが学んだ多くのメカニズムがスケッチとして残された。それを後世の歴史家が誤ってダ・ピンチの考案としたものだった。それでも彼の偉大さに何の陰りも無い。

人間に神の造った傑作が凝集している。人体は構造体、機械要素、エネルギー循環系を探る一番の教材だった。究極的に地球の息吹(生き長らえる仕組み)を探求し、「土は地球の肉で、岩石は骨、そして地下水は血脈である。」とした。

1871年(明治4年)11月12日に久米邦武は岩倉具視使節団団員として米欧に渡る。久米は実に瑞々しい目で米欧の文化、特に科学技術に触れその成果を米欧回覧実記として持ち帰る。出版は、明治11年である。当時の米は独立の気風色濃く共に舶来と黒船を尊ぶ日本の先を行く先達であった。丁度鼻放れ小僧が成人を迎えた青年を仰ぎ見るのが日本、その青年が大志を抱いて紳士たる欧州を見ているのが米だったのかもしれない。米も当時は親離れしながらも必死で欧州を模倣し、尊敬していたのである。「米人ニテム国産ナレハ賤悪ト謂ヒ、欧州の舶来ヲ尊フノ風アリ・・・」「自家ノ珍ヲ珍トセスシテ、他人ノ奇ヲ羨ム・・・」(久米邦武(田中彰校注)、米欧回覧記[1]、岩波文庫2000年6月、p. 321)。

工部省に始まり全国に帝大と言う巨石が据えられ、その中ほどに特化した形での高等工業が本学も含め明治熟年期に配置された。

幾つかの大戦を経て、昭和の民主主義に到り、ここに大戦復興を全国津々浦々から巻き上げようと地方大学へと再編された。戦後の申し子たるベビーブーム世代が50歳代半ばに入った今、本邦は高度成長期を果たした。個々一人一人が個性を発揮する時代となり、これまでのマスプロ的価値観はバブルの飛散と共に



消え失せようとしている。同時に自然界もその水脹れの重みに耐えかねて温暖化やエイズ等の、上の空で聞いたマルサスの、一面を覗かせて、我々に変革を迫っている。

明治以来の高等教育機関に課せられた使命が終わった

帝大は暫く前に大学院重点化体制に移行し本学を含め地方大学工学系が博士課程設置を果たした時には再び水を明け引き離している。今も国立大学法人化とそれに先立つCOEで帝大と東工大は万進の力を込めて変革に打ち込んでいると見える。

格の違いと力の差は歴然としているのに、本学はどのように生き抜くのか。ここ2-3年は変革の年となるだろう。

大学等への進学率は50%を越えた今、大学生は何れの面からも実にパラサイトである。有り余る自由度を持って余し、将来を計りきれないでいるとも見える。だからこそ余計に教育と回り道が必要なのだろう。

研究は大学教育の根源である。歌を忘れたカナリヤは歌唱指導出来ない。例え衰え掠れようと四季折々での営みや他に学んでの感動を洪い声で語り鳴かねばならぬ。そのエッセンスでこそ雛鳥を育て巣立たせ、同僚の若いカナリヤ達を世に送り込むことになるのだから。

[目次](#) [次](#)

2. 退官教・職員挨拶

高橋寛教授

退官を迎えて

小学校から大学までを振り返って、天然色で思い出せる時期が二つある。一つは小学校6年の時で、熱血漢の若い男の先生が全力で子供にぶつかってくれた。成績に関係なく、クラス全体が仲良かった。

もう一つは山形大学で、熊倉研究室の卒研究生になった時である。クリスマスに先生のお宅によんで頂いて、奥様の手料理をご馳走になったこと。わい歌しか知らない連中が、神妙に賛美歌を合唱したこと。蔵王のコーボルトヒュッテにスキーに行ったこと。冬、研究室のだるまストーブで洗濯ものを干したことなどなど。その時の6人の仲間は生涯の友となった。



大学卒業後、東京の民間会社に4年、東北大学に6年お世話になった後、熊倉先生によんでいただいて母校に奉職することになった。その時思ったことは、私が学生時代に経験した楽しい思い出を学生にも味わわせてやりたいということであった。私が熊倉先生のお宅のトイレで酔いつぶれたのだから、学生達も私の家で酔いつぶれるのは当然のことだということである。かみさんは随分困ったと思うが、熊倉先生への恩返しだということは理解してくれていたと思う。

爾來30年、私にとっては毎年のことでも、学生にとっては一生に一度のこと、一期一会を大切にしなければと思ってきた。卒業研究を指導する過程で、学生を時には叱らなければならない時がある。お互いにまだ気持ちが通じ合わないままに叱ると、学生の気持ちは離れてしまって二度ともどらなくなるということを知った。心底で信頼している場合には、他人のいない所で叱ればしっかり応えてくれることを知った。これは自分の子供の場合でも同じであった。

そこで4月新しい卒研究生と出合って、彼等といかに心を通じ合わせるかということが、卒業研究始めの課題であった。私が30才台のころは私の好きな酒、登山やマラソン、碁やトランプ等で学生と遊びころげているうちに、彼等を好きになった。しかし私が40才台になると、学生が遊びに付き合ってくれなくなった。時代の流れとお互いの年齢差のためである。50才台になるとほとんど親子の関係となり、彼等が本を読まないこともあって、共通の話題がなくなってしまった。

こんな時熊倉先生はどうしていただろうと思出すことがある。熊倉先生は無条件に我々を好きになってくれたのかもしれない。私が学生を好きになるときは、理由を見つけたがっているのかもしれない。そうすると私はまだまだ未熟なんだと思う。このまま定年を迎えてしまうのは少々残念な気もするが、人間修行だけは続けていきたいと思う。

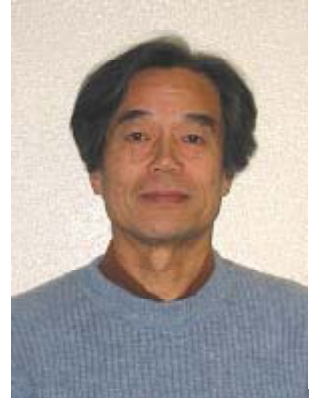
山形大学は昨年来、入試過誤・独立法人化・JABEE認定など大きな問題に揺さぶられ、急激な変化を求められている。変化の方向の良否は別にして、変化することそのものは万物全ての宿命である。その変化に対応することが、若さであろうと思う。若い力は確実に育っており、山形大学の将来に何の不安もない。

ただ変わって欲しくないものが一つだけある。教職員にとっても、学生にとっても、“学校にすることが楽しい”ということが、米沢高専以来の山形大学工学部の伝統であったと思う。この伝統だけは若い人に引き継いでいって欲しいと願う。

八木田幹教授

退職にあたって

山大工学部に赴任してきた平成2年の4月は、学科改組により機械工学科と精密工学科が一つになり、機械システム工学科へと名前を変えた時でした。従って、学科の名前は変わってもしばらくの間、在校生は元の学科名で卒業するという過度期でした。元の二つの学科にはそれぞれの気風があり、その違いが学生指導の面にもでてきた時がありましたが、それも間もなく融合・調和がとれ、大講座制のもとに新しい学科として生まれ変わったと言えそうです。米沢に来て、最初に嬉しく感じたのは、前任地で自分が提案していたけれど実現しなかった少人数による「輪講」がすでに実施され、定着していたことです。大学に入ったら、自分で考え、自分で決定し、行動することを身に付けることが大事なことの一つであると、日頃から学生君に言ってきたので、とにかく受身となりがちな講義と異なり教官と身近に接しながらの輪講は、学生君が能動的に取り組める講義形態の一つではないかと考えていたからです。前任地で実現しなかったのは、教官の負担が増すというのが大きな理由でした。この一つを見ても、山大機械システム工学科はきめ細かな学生指導をしているなと感じたものです。その後の教養部の廃止に伴う教養教育の変化のなかで、小白川の1年生に機械工学基礎の講義を行うため、多数の教授が遠路出かけてゆくのも同じ教育における熱意の表れと理解しました。



今、国立大学の法人化を前に、教官人事に任期制を導入する話がでてきています。任期をつけられた教官の目が学生君からどちらの方に向けられてしまうのか、予想されるのは、ギスギスした人間関係が強まる中で、余裕を無くし、孤立した教官群としわ寄せされた学生君たちの姿です。そうならないように、退職してゆく者としては祈るしかありませんが、研究所と異なり、大学は学生あつての大学であることをくれぐれも忘れないで欲しいものです。

八木田 幹

鈴木和雄技官

機械工作を通して

昭和51年3月に山形大学工学部機械工学科機械工場に勤務してから26年、山形大学工学部・短期大学部そしてBコースに対する機械工作実習（特殊機械）指導の中で関わった、学生だった頃の皆さんとの、楽しかった思い出が目に浮かぶようです。以前は、機械工学科（M）・精密工学科（S）（現機械システム工学科）だけではなく、繊維工学科（T）・化学工学科（K）の学生に対する機械工作実習がカリキュラムに組み込まれており、ほんとに多くの学生と、機械工作技術指導を通して関わりを持つことができました。感謝致しております。



また、教官研究や卒業研究・修士研究等の実験装置製作、試験片製作をお手伝いして来ました。図面では簡単に書ける部品も、実際に作るとなるといろいろ工夫を入れながら、そして時間をかけないと出来上がらない事を、先生方は勿論、学生だった皆さんと議論したことが思い出されます。楽しい思い出です。

私は、平成14年度をもって定年退官いたしますが、縁あって1年間、再任用ということで機械工場にお世話になることになっております。もう少し学生との関わりが持てることは大変嬉しいことで、機械工作を通しての学生指導の面白さを満喫したいと思います。

鈴木 和雄

木村芳治技官

退官にあたって

私は、昭和38年5月に山形大学工学部機械工学科に奉職して約40年間お世話になりました。当時は一部（旧精密工学科など）を除き殆どの建物が木造であり、現在文化財になっている旧本館の正面玄関から中央にまっすぐの廊下が通っており、左右に各科への廊下が枝分かれの状態であったと思います。学寮もキャンパス内にあり外に出ることなく行けました。各科とも中央廊下とつながっている事で他科の先生方と顔を合わせる機会も多く、殆どの方と面識をもつ事ができた時代でした。現在は建物も高層化され同科でも日頃顔を合わせる事が少なくなっております。



私は、当初機械工場勤務でしたが、昭和45年から流体関係の機械第3講座に配置換えになり大木研究室に6年、上原教授の下では、先生がご退官になられたときまで16年、そして学科名が機械システム工学科に変わり八木田教授の下で11年間お世話になり現在に至っております。私が研究室所属になった折、大先輩の技官の方から受けた、大学の技官としてのあり方のアドバイスを常に心がけてまいりました。それは、「大学の技官は、教官からの要望に対し、一見自分に無理かなと思えることでも逃げず、先ず取り組み工夫する事、そうすれば意外と道が開ける。」と教えられたのでした。そのためには、専門知識のみならず、無駄とも思えるような雑学的知識も大いに必要でありました。

この40年間に於いて学生諸君と一緒に開発・設計・製作したものは、大きなものでは、口径700mm全長30m強の回流風洞や測定用小屋などの建築物から、小は10mm程度のマイクロファン、圧力センサーなどの小さなものまで様々のものを製作し実験してまいりました。学生諸君との、もの作りで完成の喜びや開発途上での苦労などをかみ締めることができたことは、今では楽しい思い出の一つ一つであります。

数年前、原因不明な状況で突発的に両耳聴力の大半を失ってしまい、一時退職を覚悟したのですが、研究室の八木田先生、鹿野先生はじめ多くの方々の温かいご理解とご協力により本日まで務めさせて頂く事ができました。聴力を失ってからのこの6年間において、文部科学省の科学研究補助金（奨励B）を3回頂き研究業務にも従事させて頂きました。又3年生の学生実験用装置として設計製作したものが現在も稼働しており、私としては納得できる状態で職を辞する事ができる喜びは、ひとえに多くの方々の支えがあればこそと感謝しているところであります。紙面をお借りして心よりお礼を申し上げます。

友誼会の皆様には、工場見学の折り、また学生諸氏の就職等において大変お世話になりありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。今後ともよろしく願い申し上げますと共に、会員皆様のご多幸とご活躍をお祈り申し上げます。

木村 芳治

小山田扶二子事務官

友誼会の皆様へ

私の山形大学工学部での勤務生活は、化学工学科でスタートしました。当時は産業界の要請により、工学部出身の新入社員大歓迎の時代でありました。それに伴い、各地の大学は学科新設ラッシュに巡り合わせ、その中において本学の新設学科第一号が化学工学科でした。私としては純粹の事務職のつもりでおりましたが研究室に配属となり、とまどったものでした。

研究室での仕事は好きでもない化学実験でした。仕事と思えばいやとはいえず何とかしなければと自分なりに必死の毎日でした。しかし、今振り返ってみますとそれが土台となって、少々のは何でも頑張ろうという気持ちと、やり遂げた時の満足感が化学工学科での12年間を支えてきたような気がします。

縁があって、昭和48年4月より精密工学科の事務室へ配置換えになりました。それこそ自分の希望が叶ったので、やる仕事それぞれが何でも楽しく、研究や実験とも違い、工夫次第では即結果が出せるということは本当にうれしいものでした。しかもその時の主任教授であられた故熊倉重典先生は些細なことでもほめて下さり、慣れない事務の仕事に対しても大きなそれが励みとなったものでした。本当に先生は人の使い方が上手だったなとしみじみ思い出されます。

年々歳々同じ年齢の学生さん達を相手に、卒業研究着手・卒業判定の単位の子エックや、就職用書類の作成などをルーチンワークとして、はや30年、今年還暦を迎えました。学生の皆さんからは年齢よりも若く見えるなんて言われるのを良いことに40年余りを過ごしてきました。その上、良き上司や同僚に恵まれ、若い学生に励まされていよいよゴールイン出来そうです。

最近発表されたの文部科学省の就職内定状況調査によれば、今年の10月1日現在で、全国国公立大学理系の就職内定率は66.4%との数値がでていました。当機械システム工学科及び機械システム工学専攻に関しましては、学部生

85%、大学院生94%ですので、全国平均とあまりにも格差があり驚いてしまいました。日本全体が不況で大変だと言われながらも、当科では比較的順調に内定をいただけるのは、諸先輩方々のお陰と常々感じてはいましたがこのように顕著な結果に驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。

毎年3月に巣立つ学生に、今度は自分達が求人に来る立場になってと励ましてまいりました。本当に先輩の方々の存在が後輩の将来をも左右し、ひいては母校への影響が大であることの証であると、今まで本学科の事務を担当させていただいて痛感している次第です。

毎年決まった頃に来学される方、はたまた卒業以来初めてお目にかかる方など本当になつかしく楽しみにしておりました。また就職の面談をしていただいた在校生達は、事務室に立寄ってはいつも畏敬の念で先輩の話をしてきておられます。友誼会員の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

最後になりましたが、友誼会のますますのご発展と会員の皆様のご健勝をお祈りいたし、ペンをおかせていただきます。



小山田 扶二子

山口たい子技官

卒業生の皆様どうぞお元気で

とうとう今春で定年を迎えることとなりました。なんとか無事に42年勤められたことに、安堵している毎日です。山形大学そして機械システム工学科が居心地が良く、つい定年まで長居してしまいました。

初めて重要文化財の門をくぐった日を思い出します。建物の荘厳さに圧倒されつつ、これから始まる新しい生活への期待と不安に身震いました。面接試験で、得意学科は？との質問に、臆面もなく英語ですと申し上げました。面接官の石田先生が、机の上の灰皿を指さされました。もちろん、Ashtray と答えられませんでした。今思うと赤面の至りです。そんな出来の悪い私が採用になり、今日まで勤め上げられたのは、周りの方々に支えていただいたからに他なりません。



思い出しますと、最初は第一講座で高橋先生、鈴木先生の下、たくさんの大学院生、卒研生の皆さんの研究のお手伝いをさせていただきました。研究論文がどんどん書かれ、日本機械学会の投稿料で研究費が間に合わない年もありました。卒業生の皆様の青春の一時期を、ご一緒させていただいたことは、本当に光栄でした。そして、42年間ずっと機械システム工学科で仕事をさせていただけたことは、この上もない幸せなことでした。国の内外で、産業界・工業界を支えてこられた、卒業生の皆様は私の誇りです。混沌として不透明な今の世の中ですが、どうぞお元気でご活躍下さい。皆様のご多幸を心よりお祈りしつつ、感謝をこめて退官の挨拶といたします。

山口 たい子

[目次](#) [次](#)

4. 編集後記

再刊1号発行後、入試過誤問題が発生し、その処理に1年を費やした。
3年目にしてようやく再刊2号を発行する。

今回は、機械工学科の重鎮教職員6名の退官を迎え、ご本人の最後のメッセージだけを記載して、長年にわたる学科への御貢献に感謝の意を表した。その日は必ずやってくる、酒井先生の口癖であったが、信じられない速さである。

あとを引き受ける教職員、心を引き締め、教育・研究・管理・社会貢献にあたり、学科発展を目指したい。

担当教官 梅宮弘道

[目次](#)

3. 定年退官祝賀会

祝賀会は、本年同時に退官される八木田幹教授、高橋寛教授、小山田扶二子事務官、鈴木和夫技官、山口たい子技官、木村芳治技官の六名の合同祝賀会となっております。

日 時 :	平成15年3月22日(土) 午 前11時より
場 所 :	東京第一ホテル米沢(米沢市内)
会 費 :	10,000円
申込締切 :	平成15年3月10日
申 込 先 :	山形県米沢市城南四丁目三の十六 山形大学機械システム工学科内 M科退官準備会(事務担当 安藤 正昭 0238-26-3218) 振替口座 02270-9-87 989

[目次](#) [次](#)